

新たな挑戦が 自分を成長させる

日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・ビジネス・サービス事業
公益ソリューション 第二開発部
シニアITスペシャリスト

伊藤 健太郎

Kentaroh Itoh



先進的でグローバルなプロジェクトをプロジェクト・マネジャーとして指揮したい——。伊藤が日本IBMを志望したのは、そんな夢があったからだ。2003年の入社以来、公益業界を中心とする数々の企業のプロジェクトに参画し、ITスペシャリストとしてシステム開発や公益企業のビジネスを担当してきた。電力会社をはじめとする公益企業のプロジェクトという社会的責任のある仕事を担当することに、伊藤は大きなやりがいを感じている。

「公益企業のシステムは社会インフラの基盤です。万が一システムに不具合があれば、その企業だけではなく、その先にいる多数のお客様や社会全体にもご迷惑をかけてしまう。システムの品質には、そこまでやるのかというレベルまでこだわり抜くことを常に意識しています」

転機が訪れたのは2011年、日本IBMに入社して8年目のことだった。当時、仕事上で海外との接点がほとんどなかったという伊藤は、「せっかく外資系の企業にいるのだから、もっとグローバルなやりとりを増やしたい」と考えていた。そこで、IBMの新興国における社会貢献活動プログラム「Corporate Service Corps(CSC)」への参加を志願する。CSCは、世界中のIBM社員から公募で選ばれたチームが新興国に派遣され、NPO団体と共に現地が直面する課題を解決するための支援を行うプログラムだ。

「日本で仕事をしていると、日本のことだけを知ってい

ればいいという気持ちになってしまいます。でも、そんな自分が井の中の蛙になっていないかという不安がありました。海外で自分がどれだけやれるのか、挑戦したいと思ったのです」

伊藤の派遣先となったのは、ブラジル南部のポルト・アレグレだった。文化も環境も気候も日本とはまったく異なるだけでなく、現地ポルト・アレグレはポルトガル語しか通じないという言葉の壁もあった。しかしオンライン翻訳ツールを使ってポルトガル語を英語、英語をポルトガル語に変換しながら伊藤は現地のスタッフとコミュニケーションを行い、11カ国から集まったIBMの社員と共に、1カ月間のプログラムを無事終了した。

「CSCに参加することで、コミュニケーションについての考え方が変わりました。躊躇していると自分のことが相手に伝わらないし、相手のことも分かりません。自分が当たり前と思っていることも、相手にはそうではないかもしれない。重要なことは何度も確認したり、メールなどで文章化したり、仕事のコミュニケーションの仕方、CSCの参加後は大きく変わったと思います」

* * *

大学時代はデータ解析エンジンの基礎研究を専攻した。当時はまだビッグデータという言葉もない時代だが、解析エンジンの高速化は最先端の研究の一つだった。

「学生時代は研究に明け暮れていました。新しい研究

スマートなエネルギーの匠たくみ

分野だったので、努力次第で誰かの後追いだけでなく、自分たちが世界の先陣を切ることもできたのです。海外向けに論文を書いたり、逆に海外の論文を読んだりしながら、研究の最先端にいることが実感でき、手応えを感じていました」

新しいチャレンジが好きで、先進的な取り組みに携わってほしいという思いは学生時代から今も変わらず、伊藤の大きなモチベーションになっている。

セマンティックWebに関する技術書を出版したり、大学で学生向けにIT業界の最新の技術動向を紹介する講演を行ったり、「常に新しいことをやらないと、自分自身が成長しないと思っている」と語る伊藤は、意識的に新しいチャレンジを行っている。そして伊藤が今取り組んでいる大きなチャレンジが、スマートメーターだ。

＊ ＊ ＊

スマートメーターには通信機能が備わっており、電力の使用状況を30分ごとに電力会社に伝えることができる。そのため、人が目で検針する必要がなくなったり、停電などの障害をすぐに発見できたりと、より効率的な電気の利用が可能になる。2010年頃からスマートメーターのシステム構築プロジェクトのアーキテクチャー統制支援などを行っている伊藤は、この分野において日本IBM随一の実績と経験を持っている。

「日本のスマートメーターは、地域にもよりますが、1000万台規模で導入され、スマートメーターを中心とした巨大な通信ネットワークが構築されます。これだけの規模のモノと通信ネットワークを運用管理するのは簡単ではありません。日本にはない知見やノウハウを海外から得て、積極的にお客様にお伝えしています。そこがIBMの優位性になっていると思います」

スマートメーターをはじめとする新しいテクノロジーが登場したことで、かつては日本IBMのメンバーだけでやっていた仕事が、海外のIBMのメンバーの知見をもらいながら一緒に仕事していく機会が増えたと伊藤は言う。グローバルな環境の中でプロジェクトを進められるのも、ポルト・アレグレでのCSCの経験があつてのことだ。

電力自由化をはじめとして、電力業界は大きな変化の時期を迎えている。伊藤は、お客様の目線に立ちながらも、数

年後の変化を見越したシステム開発が必要だと考えている。

「新しい考え方、新しいアーキテクチャーでどうシステムを作っていくか、中長期的なお客様の成功のためにシステムの全体像をどう設計するか。そういったことを常に考えながら、お客様のビジネスに貢献できるように日々意識しています」

日本IBMの大阪事業所に籍を置く伊藤だが、週の半分以上は東京や名古屋を中心に全国各地へ出張している。しかし、何よりも新しいことや先進的な取り組みに興味があり、そこに携われることにモチベーションを感じている伊藤は、「確かに移動は多いですが、人に先んじて難しいことにチャレンジできる仕事に喜びを感じているので、それほど苦ではありません」と笑顔を見せる。「先進的でグローバルなプロジェクト」という自分がかつて描いていた夢の真ん中にいる伊藤。その屈託のない笑顔には、強い自負と充実感があふれている。



「IT業界の今を伝えたい」という思いから始めた大学での講演は、今年で3回目となる。



ブラジルでは、イグアスの滝にある世界最大級の水力発電所にも訪れた。



「CSC ブラジルチーム」には、世界11カ国から14名のIBM社員が参加した。